

慧端禅師 正受老人

大月 和彦

新幹線飯山駅の高架ホームから北の方向、小高い丘に茅葺き屋根の堂宇が見える。寺の町といわれ、お寺さんが立ち並ぶ街では目立たないが、臨済宗の高僧慧端禅師（正受老人）が終生、禅の修行に励んだ庵だ。

寛永年間に松代藩主真田信之（幸村の兄）の庶子として飯山城に生まれ育ち、若くして仏教に帰依した。江戸や東北地方の寺院で修行を積む。悟りを開いて帰国した慧端に飯山藩主松平忠俱は、小庵を建て、正受庵と名付けて贈った。

世俗的な栄達に目を向けることなく座禅三昧の生活を続け、80歳で死去するまでの45年間、臨済禅のために精進した。

慧端は臨済宗中興の祖と呼ばれた白隠の師としても知られている。各国遍歴の途上、越後高田の英巖寺から正受庵を訪れた白隠、その慢心を見抜いた慧端は、山門から上ってきた白隠を大喝一声、蹴落として、その慢心を打ち砕いた。優れた資質をのぼすため厳しく指導した。滞在すること8カ月、白隠は慧端を師と認めた。後年、今の私があるのは慧端禅師のおかげと語っている。本堂の東側にある石畳の坂が、正受庵を初めて訪れた白隠を蹴落としたと所と伝えられる。

現在の本堂は江戸末期に再建されたが、檀徒や土地を持たず安定した収入がないので荒廃が進み、廃寺になった時期もあった。明治になり、山岡鉄舟や高橋泥舟らの尽力で復興が進められた結果、昭和の初めに現在のような寺院の形になった。地元の人たちの支援が大きい。

住宅街にある入り口から石段を登ると、茅葺き屋根の本堂は、簡素で端正なたたずまい。小さいながら白砂の庭園ある。居間や台所など庵主の生活空間も。本堂の濡れ縁の壁につるされた分厚い櫨の木板（もっぱん）は時を知らせるためのもの。日に何度となく打ち鳴らされた。すり減って板がうすくなり、丸く凹んでいる。起床の「朝開板」から坐禅に入る「晚開板」まで、禅僧の厳しい生活を律した器材だ。

お寺巡りで訪れる観光客とは別に、正受老人の高徳を慕う人たちが後を絶たないという。